
私のご主人様

閃光広里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のご主人様

【Nコード】

N1928Q

【作者名】

閃光広里

【あらすじ】

次世代メイドロボであるムヴィはご主人様である藤山宏樹に誕生日プレゼントをあげようと近所のデパートにやってくるが……。

(前書き)

この短編は、「閃光ランド」内にある作品を少しアレンジしています。

故に、短編にしては登場キャラが多いです。

ご混乱になられるかもしれませんが、ご了承ください。

私の名前はムヴィです。

藤山宏樹様に使えるメイドロボです。

明日、その宏樹様のお誕生日なんです。

ですから私は今、宏樹様のプレゼントを買いにデパートに来ています。

「……そういえば、宏樹様って……何が好きなんでしょう？」

ご主人様の好みも知らないなんて……メイド失格ですね。

マヴィお姉ちゃんにこの事言ったらきつと怒るんだろうな。

どうしよう、せつかくデパートまで来たのに……。

「あれ？ ムヴィだ」

「え？」

後ろから私の名を呼ぶ声に振り返る。

「メヴィ？ どうしてここに？」

そこに居たのは、私の妹のメヴィでした。

「ムヴィもどうしてここに？」

「私は……」

そうだった、サプライズの為に機密事項にしてたんだ。

「ば、晩御飯の買い出しに……」

「買い物？　ならどうして食品売場にいないの？」
「うっ……」

しまった、ここ、洋服売場じゃないですか！

「え、えっと……」

「……何か隠してる？」

「へっ！？　隠す？　何を？」

「むっっちゃ動揺してるね」

な、何とか話をズラさないと。

「あー、そういえば、メヴィはここに用なの？」

「ううん、洋服には用は無いけど。私、ゲーム買いに来たんだ」
「ゲーム？」

メヴィはかなりのゲーム好きなんです。

「そ、そうなんだ」

「うん、ひろにプレゼントするんだ」

「えっ……」

いま、何て？

「じゃあね」

「ちよちよ、待った！」

「なに？」

「い、今何て？」

「だから、ひろにゲームをプレゼントするの」

ゲーム……そうだ、宏樹様はゲーム好きだったんだ！

「もういい？」

「う、うん、ごめんね」

メヴィと別れる。

盲点でした……。

しかし、私もゲームをプレゼントするわけにはいきませんね。

この後、数時間悩みましたが、結局答えは見つからず、晩御飯の買い出しを済まし、家に帰りました。

次の日、ギリギリまで考えて結局クッキーにしました。

だけど、急いで作ったため、形はかなりイビツで、とても私が作ったとは思えない代物になってしまいました。

パーティー開始は夕方。

作り直している時間はもうありませんでした。

宏樹様のお友達の方々がそろそろやってくる時間でもありました。全員が集まる頃には午後七時になっていました。

「はい、お兄ちゃん、おめでとう♪」

「ありがとう、りる」

「えへへ」

「……なにこれ？」

義妹の里流葉様からプレゼントを貰い、嬉しそうにリボンをほどく宏樹様の表情が変わりました。

箱の中には紙切れが数枚入っていました。

「『里流葉何でも券』だよ」

「なんかお願いが叶うの？」

「うん、雑用から身体の付き合いまで何でも♪」

「……最後のは遠慮しとくよ。でもありがとう」

苦笑しつつも宏樹様は嬉しかったようです。

「次、俺だな」

マヴィお姉ちゃんのご主人様である勇樹様がプレゼントを差し出す。

「えーと……ゲームだ」

「宏樹と言えばゲームかなと思って」

「ありがとう、勇樹」

「はーい、次私！」

隣のメヴィが手を上げる。

「勇樹君と被っちゃったけど……」

「……ゲームだね……ってこれは！」

「どうしたのお兄ちゃん？」

驚く宏樹様に皆の視線が集中します。

「これ……俺が欲しかったゲームじゃん！」

「凄いね、メヴィさん！」

里流葉様が尊敬の眼差しでメヴィを見ていました。

「ふふ、だって、ひろのメイドだもん♪」

メヴィの言葉にぐさりと何かが突き刺さった感覚に襲われる。
私も……宏樹様のメイドロボなのに……。

ご主人様の好みもわからなかったなんて……。

「かな達はケーキなんだよな？」

宏樹様を見ると、幼馴染みである井上鹿波様と佐藤美希様とお話をしていました。

「うん、私と美希とマヴィの合作だよ」

「鹿波ったら宏樹の為だからって張り切っちゃって……熱々だね」

「ちょ、美希！」

「冗談よ」

「ははっ、そういえばムヴィは？」

「え！？」

「ん？ どうした？」

突然話を振られ、すっとんきょうな声をあげてしまう。
どうしよ……みんな魅力的なプレゼントなのに……。

「ムヴィ？」

「あ、えっと……」

宏樹様が心配そうな顔で私に近づきます。
それにみんなの視線が異様に痛かった。

早くここから逃げ出したい。

「……う、ごめんなさい！」

「えっ、ちょっ、ムヴィ！？」

私はこの空気に耐えきれず、クッキーを置いて家を飛び出しました。近くの公園のベンチに腰を下ろし、逃げ出した事を後悔する。

「……」

何、やってんだろ……私は。

「宏樹様のメイド……失格です……」

「そんな事ないぞ」

「!?!」

後ろからの不意の発言に慌てて後ろに振り返る。

「宏樹……様？」

「隣、いい？」

「は、はい……」

左隣に宏樹様が腰掛ける。

「……どうして逃げたの？」

「それは……」

「……話してごらん」

「……私のプレゼントは……」

「一番質が悪いから？」

「!?!」

……やっぱり、失望しましたよね……。
私だけ……。

「俺は別にそうは思わないけどな」

「え……」

いつのまにか宏樹様の手には私のクッキーがありました。

「これ、美味しそうだよ？」

「……嘘ですよね？」

「嘘なわけないだろ」

「無理……してません？」

「はあ？　なんで無理しなきゃならないんだよ」

「私を慰めようとして、そんな事を……」

「ムヴィ……」

「あ……」

宏樹様の顔が暗くなる。

「俺がこんな事に嘘ついたり無理したりするわけないだろ」

「でも……」

「……どんなイビツな物でもな、その人の愛情は込めているものだよ？」

「……」

「ムヴィはこのクッキーを作る時に愛情込めなかったの？　それなら仕方な……」

「愛情、込めました。誰にも負けないくらいに！」

「……なら、それでいいじゃん。俺はこのプレゼントが一番嬉しかったよ」

「え……」

「俺を喜ばそうとして頑張っていたのは知ってるよ、それだけで俺はとっても嬉しいよ」

「ですが……私は宏樹様のメイド失格です……」

「失格？ 何で？」

「ご主人様の好みすらわからなかったなんて……」

「……ムヴィ」

「ひゃー！？」

不意に宏樹様が私を抱いてきました。

とても……とても暖かいです。

宏樹様は私の頭を撫でながら、耳元で「失格なわけないだろ」と言いました。

「俺の事でこんなに悩んでいるなら失格なんてあり得ないよ」

「で、でも……」

宏樹様の言葉で声が涙声になってしまう。

視界もうつすらボヤけてきました。

宏樹様は抱きしめる腕を強め、密着度が増す。

宏樹様の吐息を耳元に感じながらこう呟きました。

「それでもムヴィが失格だと思うなら、俺と一緒に努力すればいいさ、な？」

……なんて、優しい方なんですか、あなたは……。

「はい……」

「落ち着いたら戻ろうか」

「はい……宏樹様」

「ん？」

「……ありがとうございます」
「？」

首を傾げる宏樹様に少しだけ笑う。

「……もう少し、このままでいいですか？」
「いいよ」

あなたに会えてよかったです。

「来年は……頑張ります」

「うん、楽しみにしてるよ」

宏樹様の温もりを身体全体に感じながら、目をゆっくり閉じました。

★END★

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928q/>

私のご主人様

2011年1月19日07時13分発行